資料１

高校教育改革の取組の成果と課題の整理

今後、次期県立高校将来構想を検討していくに当たり、これまでの高校教育改革の取組の成果と課題を①学級減、統廃合、②全県一学区化の項目について整理した。

1　高校教育改革の取組の成果と課題の整理（①学級減、統廃合）

（1）第３期県立高校将来構想における考え方

本県の中学校卒業者数は、構想期間中の令和元年度から令和10年度までの間に1,700 人程度（約８％）減少する見込みであることから、学校の再編や学級減を行い、高校入学者定員の適正化を図る。

①学校配置

・本県は平成２２年度から「全県一学区化」とした。平成２６年７月の県立高等学校将来構想審議会が行った「全県一学区化」の検証では、一定の地区間の流動性は認められたものの、特定の地区や学校への生徒の集中は見られず、多くの場合、近隣の高校へ進学する傾向が見られると結論付けられた。このため、各地区の高校への進学実績や公共交通機関の状況、生活圏等を考慮して、**一定の地域的なまとまりの中で学校配置を考えていくこととした。**

・地区によって、中学校卒業者数の見込みやその減少率、所在する高校数や地区内での配置等の状況は異なるが、**いずれの地区においても、生徒の興味・関心や多様な進路希望に対応できる教育環境を整備し、教育の機会均等を確保することとした。**

・各地区での学校配置を考えていく上で、その地区における高校の在り方を踏まえて、学習環境や課外活動の充実を図るため、通学への影響や地区内での学科バランスなどにも配慮も検討することとした。

② 適正な学校規模

・生徒の興味・関心や多様な進路希望に対応できるような教科・科目の開設とともに、学習活動や学校行事の充実など、活力ある教育環境の確保には一定の学校規模が必要であり、**適正な学校規模を１学年４～８学級を目安とした。**

・**現状で適正規模を満たさない学校については**、その学校が所在する地域における高校の在り方を検討した上で、**学習環境や課外活動の充実を図ることを目的として再編を検討**することとした。

・ただし、その検討に当たっては、地域の実情等を十分に考慮し、特例的な取扱いも含めて検討することとした。

（２）第３期県立高校将来構想期間中の主な動き

中学校卒業者数の減少に対応し、活力ある教育環境の充実を図るため、再編統合や学級減を実施した。

①　再編等（全日制公立高校数　H30:69校　→　R6:68校）

年度	内容
R5	・**大河原産業高校の新設**（大河原商業高校、柴田農林高校を再編統合）
R7 （予定）	・**白石高校蔵王キャンパス**（蔵王高校の分校化） ・**築館高校一迫商業キャンパス**（一迫商業高校の分校化）
R9 （予定）	・**大崎地区（東部ブロック）職業教育拠点校の新設**（松山高校、鹿島台商業高校、南郷高校を再編統合） ・**新たなタイプの学校の新設**（宮城広瀬高校を転換）

②　学級減（全日制公立高校学級数　H30:366学級　→　R10:335学級（▲31学級））

年度	減クラス数	地区別						
		南部	中部	大崎	栗原	登米	石巻	気仙沼
H31	1						石巻工6→5機械	
R2	6		仙台西7→6、仙台東7→6、 宮城広瀬7→6、泉館山7→6、 黒川6→5機械				石巻商5→4	
R3	2	大河原商業5→4					石巻北5→4	
R4	8		名取北7→6、泉7→6、 宮城野7→6、塩釜9→8	岩出山3→2	岩ヶ崎3→2	登米3→2	桜坂5→4 【石巻市】	
R5	3	大商4＆柴農4 →大河原産業6	松島5→4					
R6	3		亘理5→4商業	鹿島台商3→2、 涌谷4→3				
R7	5	蔵王2→1（分）	富谷7→6		迫桜5→4、 一迫商2→1（分）		水産4→3	
R8								
R9	3		宮城広瀬6→5 ※新たなタイプの学校へ転換	松山2＆鹿商2＆ 南郷2 →大崎東部4				
R10								

（３）現状・将来推計

①　出願倍率・充足率の状況（令和６年度宮城県公立高等学校入学者選抜結果）

◎地区別出願者数・合格者数等（全日制課程）　（単位：人、％）

地　区	募集定員	第一次募集 出願者数	第一次募集 合格者数	中高一貫教育 進学者数	第二次募集 合格者数	全合格者数	充足率
南　部	1,440	1,130	1,085	－	27	1,112	77.2
中　部	7,480	8,940	7,272	104	30	7,302	97.6
大　崎	1,600	1,218	1,164	92	24	1,188	74.3
栗　原	520	360	355	－	2	357	68.7
登　米	560	446	442	－	0	442	78.9
石　巻	1,440	1,118	1,105	－	17	1,122	77.9
気仙沼・本吉	600	397	394	35	1	395	65.8
総　　計	13,640	13,609	11,817	231	101	11,918	87.4

※　中高一貫教育進学者数は、連携型選抜合格者数と併設型中学校から併設型高校への進学者数を合わせたもの。第一次募集合格者数の内数である。

◎学科別出願者数・合格者数等　（単位：人、％）

	学　科	募集定員	第一次募集 出願者数	第一次募集 合格者数	中高一貫教育 進学者数	第二次募集 合格者数	全合格者数	充足率
1	普　通	8,720	9,266	7,937	216	69	8,006	91.8
2	農　業	640	591	508	－	5	513	80.2
3	工　業	1,480	1,350	1,267	－	7	1,274	86.1
4	商　業	1,040	978	833	15	6	839	80.7
5	水　産	240	161	160	－	0	160	66.7
6	体　育	120	107	109	－	0	109	90.8
7	英　語	80	88	80	－	0	80	100.0
8	家　庭	120	80	76	－	4	80	66.7
9	看　護	40	40	40	－	0	40	100.0
10	理　数	120	170	120	－	0	120	100.0
11	美　術	40	52	41	－	0	41	102.5
12	総　合	840	535	502	－	10	512	61.0
13	福　祉	40	24	24	－	0	24	60.0
14	災害科学	40	54	40	－	0	40	100.0
15	探　究	80	113	80	－	0	80	100.0
計		13,640	13,609	11,817	231	101	11,918	87.4

※　中高一貫教育進学者数は、連携型選抜合格者数と併設型中学校から併設型高校への進学者数を合わせたもの。第一次募集合格者数の内数である。

②　１学年３学級以下の学校の状況　全17校（令和6年時点）

地区	学校数	１学年４学級以上		１学年３学級以下	
南部	9	5	（55.6%）	4	（44.4%）
中部	29	29	（100.0%）	0	（0.0%）
大崎	11	4	（36.4%）	7	（63.6%）
栗原	4	2	（50.0%）	2	（50.0%）
登米	3	2	（66.7%）	1	（33.3%）
石巻	8	8	（100.0%）	0	（0.0%）
気仙沼・本吉	4	1	（25.0%）	3	（75.0%）
計	68	51	（75.0%）	17	（25.0%）

※中部地区、石巻地区を除く地区において、
適正規模未満の学校の所在割合が高い

③　**中学校卒業者数・必要学級数の将来推計**

・　R5.3　19,973人 → **R20.3　12,830人**（▲7,143人、 ▲ 35.8%）

・　R6実学級数　343学級　→　**R20必要学級数※　200学級**（ ▲ 143学級、 ▲ 41.7 %）

⇒　**中学校卒業者数については、多くの地区で半数以上の減少が見込まれる。特に南部、栗原、気仙沼・本吉地区は減少傾向が高い。また、実学級数と必要学級数の乖離を解消するためには、大規模な定員の見直しが必要と見込まれる。**

	中学校卒業者数(人)		減少数(人)	減少率	R6
	R5.3卒(a)	R20.3卒(b)	c=b-a	c／a	実学級数
南部	1,510	663	▲ 847	▲56.1%	36
中部	13,468	9,730	▲ 3,738	▲27.8%	189
大崎	1,768	898	▲ 870	▲49.2%	40
栗原	513	184	▲ 329	▲64.1%	13
登米	652	321	▲ 331	▲50.8%	14
石巻	1,527	804	▲ 723	▲47.3%	36
気仙沼･本吉	535	230	▲ 305	▲57.0%	15
合計	19,973	12,830	▲ 7,143	▲35.8%	343

※必要学級数の算出方法

① 中学校卒業見込者数 × ② 全日制進学率 ± ③ 県内地区間出入 ± ④ 県外流出入 − ⑤ 全日制私立高校必要定員 ＝ 全日制公立高校必要定員

÷40(人)

必要学級数

（4）課題

○　現状の充足率や少子化の急速な進行を踏まえると、今後更なる定員の適正化が必要である。

○　学校や地域により実態が異なるため、地域の状況を踏まえた学校・学科の配置の在り方について検討が必要である。

2　高校教育改革の取組の成果と課題の整理（②全県一学区化）

（1）全県一学区化の施策の概要

○　**実施状況**

・平成22年度の入学者選抜から全県一学区とした。

○　**決定の理由**

・生徒の学校選択の自由が確保され、学校の活性化が期待されるなど、通学区域の撤廃によってもたらされる効果が大きい。
・特定の地区・学校への志願者の集中や学校間格差の助長などの懸念事項については、しっかりとした対策を取り組むことによって回避することが十分に可能。

（2）全県一学区化に関する検証（平成26年度検証時）

○　**経緯**

・平成23年度から平成26年度にかけて、県立高等学校将来構想審議会において、全県一学区化の成果等に関する検証を実施した。　→　**平成26年７月答申**

＜検証に用いた主なデータ＞

・生徒の地区間流出入の状況、出願・学力の状況　など

【参考：高校教育改革の成果等に関する検証「全県一学区化」について（H26.7県立高等学校将来構想審議会答申内容）】

・現段階では、特定の地区・学校への志願の集中は見られないが、全県一学区化前と比較して、一定程度、地区間の流動化が進んでおり、学校の選択幅が拡大したと言える。 ・特定の地区・学校への志願者の集中や生徒の流出に伴う学力低下は、現時点では見られない。

（3）全県一学区化に関する現状把握

○　全日制公立高校への進学者の地区間流出入の状況（平成21年と平成26年の比較）

・全県一学区化前と比較して、全体として流入数・流出数が増加（＋1.8ポイント）している。
・南部地区において、流入数（＋7.9ポイント）と流出数（＋6.4ポイント）の増加が見られる。

流入（他地区の中学校からの進学者数）
流出（他地区の高校への進学者数）
→ 地元高校への進学者数

○H21.3卒業生

（単位：人）

		進学者数	高校所在地 南部	中部	大崎	栗原	登米	石巻	気仙沼
中学校所在地	南部	1,500	1,388	112					
	中部	8,061	184	7,736	123	5	1	11	1
	大崎	1,557	2	46	1,441	15	11	42	
	栗原	517		11	44	425	37		
	登米	684	1	5	28	87	541	9	13
	石巻	1,824	4	66	37	1	2	1,713	1
	気仙沼	794	4	6	1	1	11	5	766
	計	14,937	1,583	7,982	1,674	534	603	1,780	781

（単位：人）

	流入数【A】		流出数【B】		差（A－B）
南部	195	(12.3%)	112	(7.5%)	83
中部	246	(3.1%)	325	(4.0%)	▲79
大崎	233	(13.9%)	116	(7.5%)	117
栗原	109	(20.4%)	92	(17.8%)	17
登米	62	(10.3%)	143	(9.1%)	▲81
石巻	67	(3.8%)	111	(3.7%)	▲44
気仙沼	15	(1.9%)	28	(1.9%)	▲13
計	927	(6.2%)	927	(6.2%)	0

○H26.3卒業生

（単位：人）

		進学者数	高校所在地 南部	中部	大崎	栗原	登米	石巻	気仙沼
中学校所在地	南部	1,413	1,217	193			1	2	
	中部	8,120	305	7,671	130	1		12	1
	大崎	1,496	1	96	1,339	8	4	47	1
	栗原	512		8	54	417	33		
	登米	657	1	6	26	81	505	37	1
	石巻	1,559		68	18		1	1,472	
	気仙沼	689	2	7	1		13	1	665
	計	14,446	1,526	8,049	1,568	507	557	1,571	668

（単位：人）

	流入数【A】		流出数【B】		差（A－B）
南部	309	(20.2%)	196	(13.9%)	113
中部	378	(4.7%)	449	(5.5%)	▲71
大崎	229	(14.6%)	157	(10.5%)	72
栗原	90	(17.8%)	95	(18.6%)	▲5
登米	52	(9.3%)	152	(7.9%)	▲100
石巻	99	(6.3%)	87	(6.4%)	12
気仙沼	3	(0.4%)	24	(0.4%)	▲21
計	1,160	(8.0%)	1,160	(8.0%)	0

○変化量

	H26.3-H21.3 流入数		流出数	
南部	114	7.9%	84	6.4%
中部	132	1.6%	124	1.5%
大崎	▲4	0.7%	41	3.0%
栗原	▲19	▲2.7%	3	0.8%
登米	▲10	▲0.9%	9	▲1.1%
石巻	32	2.5%	▲24	2.7%
気仙沼	▲12	▲1.5%	▲4	▲1.5%
計	233	1.8%	233	1.8%

【宮城県教育庁調べ】

○　全日制公立高校への進学者の地区間流出入の状況（平成21年と平成31年の比較）

・全県一学区化前と比較して、全体として流入数・流出数が増加（＋2.4ポイント）している。
・南部地区において、流入数（＋11.5ポイント）と流出数（＋10.3ポイント）が増加している。
・栗原地区において、流入数（▲6.5ポイント）が減少している。

○H31.3卒業生　（単位：人）

		進学者数	高校所在地						
			南部	中部	大崎	栗原	登米	石巻	気仙沼
中学校所在地	南部	1,247	1,025	222					
	中部	7,966	309	7,527	115			15	
	大崎	1,402	2	97	1,240	11	3	49	
	栗原	448		10	52	352	33	1	
	登米	580	3	10	43	46	450	26	2
	石巻	1,386	5	67	18		3	1,291	2
	気仙沼	531	1	7	2		9	2	510
	計	13,560	1,345	7,940	1,470	409	498	1,384	514

（単位：人）

	流入数【A】		流出数【B】		差（A－B）
南部	320	(23.8%)	222	(17.8%)	98
中部	413	(5.2%)	439	(5.5%)	▲ 26
大崎	230	(15.6%)	162	(11.6%)	68
栗原	57	(13.9%)	96	(21.4%)	▲ 39
登米	48	(9.6%)	130	(8.3%)	▲ 82
石巻	93	(6.7%)	95	(6.7%)	▲ 2
気仙沼	4	(0.8%)	21	(0.8%)	▲ 17
計	1,165	(8.6%)	1,165	(8.6%)	0

○変化量

	H31.3-H21.3			
	流入数【A】		流出数【B】	
南部	125	11.5%	110	10.3%
中部	167	2.1%	114	1.5%
大崎	▲ 3	1.7%	46	4.1%
栗原	▲ 52	▲6.5%	4	3.6%
登米	▲ 14	▲0.6%	▲ 13	▲0.8%
石巻	26	3.0%	▲ 16	3.0%
気仙沼	▲ 11	▲1.1%	▲ 7	▲1.1%
計	238	2.4%	238	2.4%

○　全日制公立高校への進学者の地区間流出入の状況（平成21年と令和5年の比較）

・全県一学区化前と比較して、全体として流入数・流出数が増加（＋2.4ポイント）している。
・南部地区において、流入数（＋7.9ポイント）と流出数（＋13.6ポイント）が増加している。
・栗原地区において、流入数（▲6.0ポイント）が減少するとともに、流出数（＋8.0ポイント）が増加しており、主な流出先は大崎・登米地区となっている。
・平成31年との比較では、中部地区の流出数（▲1.3ポイント）が減少している。

○R5.3卒業生　（単位：人）

		進学者数	高校所在地						
			南部	中部	大崎	栗原	登米	石巻	気仙沼
中学校所在地	南部	1,218	962	255	1				
	中部	7,246	235	6,943	52	1	1	14	
	大崎	1,187	5	83	1,043	7	4	45	
	栗原	400		15	59	297	28	1	
	登米	533	1	14	24	42	416	35	1
	石巻	1,197	2	81	16		2	1,095	1
	気仙沼	419	1	5	1		12	5	395
	計	12,200	1,206	7,396	1,196	347	463	1,195	397

（単位：人）

	流入数【A】		流出数【B】		差（A－B）
南部	244	(20.2%)	256	(21.0%)	▲ 12
中部	453	(6.1%)	303	(4.2%)	150
大崎	153	(12.8%)	144	(12.1%)	9
栗原	50	(14.4%)	103	(25.8%)	▲ 53
登米	47	(10.2%)	117	(8.8%)	▲ 70
石巻	100	(8.4%)	102	(8.4%)	▲ 2
気仙沼	2	(0.5%)	24	(0.5%)	▲ 22
計	1,049	(8.6%)	1,049	(8.6%)	0

○変化量

	R5.3-H21.3			
	流入数【A】		流出数【B】	
南部	49	7.9%	144	13.6%
中部	207	3.0%	▲ 22	0.1%
大崎	▲ 80	▲1.1%	28	4.7%
栗原	▲ 59	▲6.0%	11	8.0%
登米	▲ 15	▲0.1%	▲ 26	▲0.2%
石巻	33	4.6%	▲ 9	4.7%
気仙沼	▲ 13	▲1.4%	▲ 4	▲1.4%
計	122	2.4%	122	2.4%

【参考】全日制高校（公立＋私立）への進学者の地区間流出入の状況（平成21年と平成26の比較）

・全県一学区化前と比較して、全体として流入数・流出数が増加（＋1.5ポイント）している。
・南部地区において、流入数（＋7.9ポイント）と流出数（＋8.5ポイント）の増加が見られる。

○H21.3卒業生　（単位：人）

		進学者数	高校所在地						
			南部	中部	大崎	栗原	登米	石巻	気仙沼
中学校所在地	南部	1,578	1,388	186	3	0	0	0	1
	中部	12,518	186	12,133	165	5	1	11	17
	大崎	1,798	2	99	1,628	15	11	42	1
	栗原	549	0	32	54	425	37	0	1
	登米	722	1	22	45	87	541	9	17
	石巻	1,934	4	154	57	1	2	1,713	3
	気仙沼	904	4	17	1	1	11	5	865
	計	20,003	1,585	12,643	1,953	534	603	1,780	905

（単位：人）

	流入数【A】		流出数【B】		差（A－B）
南部	197	(12.4%)	190	(12.0%)	7
中部	510	(4.0%)	385	(3.1%)	125
大崎	325	(16.6%)	170	(9.5%)	155
栗原	109	(20.4%)	124	(22.6%)	▲ 15
登米	62	(10.3%)	181	(25.1%)	▲ 119
石巻	67	(3.8%)	221	(11.4%)	▲ 154
気仙沼	40	(4.4%)	39	(4.3%)	1
計	1,310	(6.5%)	1,310	(6.5%)	0

○H26.3卒業生　（単位：人）

		進学者数	高校所在地						
			南部	中部	大崎	栗原	登米	石巻	気仙沼
中学校所在地	南部	1,534	1,219	309	2	0	1	2	1
	中部	13,137	307	12,641	158	1	0	12	18
	大崎	1,839	1	173	1,600	8	4	47	6
	栗原	538	0	22	64	417	33	0	2
	登米	699	1	31	37	81	505	37	7
	石巻	1,690	0	182	28	0	1	1,472	7
	気仙沼	767	2	24	2	0	13	1	725
	計	20,204	1,530	13,382	1,891	507	557	1,571	766

（単位：人）

	流入数【A】		流出数【B】		差（A－B）
南部	311	(20.3%)	315	(20.5%)	▲ 4
中部	741	(5.5%)	496	(3.8%)	245
大崎	291	(15.4%)	239	(13.0%)	52
栗原	90	(17.8%)	121	(22.5%)	▲ 31
登米	52	(9.3%)	194	(27.8%)	▲ 142
石巻	99	(6.3%)	218	(12.9%)	▲ 119
気仙沼	41	(5.4%)	42	(5.5%)	▲ 1
計	1,625	(8.0%)	1,625	(8.0%)	0

○変化量

	H26.3-H21.3			
	流入数【A】		流出数【B】	
南部	114	7.9%	125	8.5%
中部	231	1.5%	111	0.7%
大崎	▲ 34	▲1.3%	69	3.5%
栗原	▲ 19	▲2.7%	▲ 3	▲0.1%
登米	▲ 10	▲0.9%	13	2.7%
石巻	32	2.5%	▲ 3	1.5%
気仙沼	1	0.9%	3	1.2%
計	315	1.5%	315	1.5%

全日制高校（公立＋私立）への進学者の地区間流出入の状況（平成21年と平成31年の比較）

・全県一学区化前と比較して、全体として流入数・流出数が増加（＋2.2ポイント）している。
・南部地区において、流入数（＋11.5ポイント）と流出数（＋12.3ポイント）の増加が見られる。
・栗原地区において、流入数（▲6.5ポイント）が減少している。

○H31.3卒業生　（単位：人）

		進学者数	高校所在地						
			南部	中部	大崎	栗原	登米	石巻	気仙沼
中学校所在地	南部	1,354	1,025	325	1	0	0	0	3
	中部	12,395	312	11,903	141	0	0	15	24
	大崎	1,725	2	185	1,466	11	3	49	9
	栗原	479	0	25	66	352	33	1	2
	登米	636	3	48	56	46	450	26	7
	石巻	1,509	5	173	30	0	3	1,291	7
	気仙沼	587	1	14	4	0	9	2	557
	計	18,685	1,348	12,673	1,764	409	498	1,384	609

（単位：人）

	流入数【A】		流出数【B】		差（A－B）
南部	323	(24.0%)	329	(24.3%)	▲ 6
中部	770	(6.1%)	492	(4.0%)	278
大崎	298	(16.9%)	259	(15.0%)	39
栗原	57	(13.9%)	127	(26.5%)	▲ 70
登米	48	(9.6%)	186	(29.2%)	▲ 138
石巻	93	(6.7%)	218	(14.4%)	▲ 125
気仙沼	52	(8.5%)	30	(5.1%)	22
計	1,641	(8.8%)	1,641	(8.8%)	0

○変化量

	H31.3-H21.3			
	流入数【A】		流出数【B】	
南部	126	11.5%	139	12.3%
中部	260	2.0%	107	0.9%
大崎	▲ 27	0.3%	89	5.6%
栗原	▲ 52	▲6.5%	3	3.9%
登米	▲ 14	▲0.6%	5	4.2%
石巻	26	3.0%	▲ 3	3.0%
気仙沼	12	4.1%	▲ 9	0.8%
計	331	2.2%	331	2.2%

全日制高校（公立＋私立）への進学者の地区間流出入の状況（平成21年と令和5年の比較）

・全県一学区化前と比較して、全体として流入数・流出数が増加（＋2.6ポイント）している。
・全県一学区化前と比較して、中部地区における流入数が増加（＋3.1ポイント）している。特に、南部地区、大崎地区、石巻地区からの流入数が増加している。令和２年度からの私立高等学校授業料の実質無償化の影響などによる中部地区の私立高校への進学者数の増加が考えられる。

○R5.3卒業生　（単位：人）

		進学者数	高校所在地						
			南部	中部	大崎	栗原	登米	石巻	気仙沼
中学校所在地	南部	1,355	963	385	1	0	0	1	5
	中部	11,887	236	11,506	87	1	1	34	22
	大崎	1,587	6	186	1,330	7	4	47	7
	栗原	432	0	31	74	297	28	1	1
	登米	582	1	41	41	42	416	35	6
	石巻	1,362	2	226	27	0	2	1,104	1
	気仙沼	486	1	16	1	0	12	5	451
	計	17,691	1,209	12,391	1,561	347	463	1,227	493

（単位：人）

	流入数【A】		流出数【B】		差（A－B）
南部	246	(20.3%)	392	(28.9%)	▲ 146
中部	885	(7.1%)	381	(3.2%)	504
大崎	231	(14.8%)	257	(16.2%)	▲ 26
栗原	50	(14.4%)	135	(31.3%)	▲ 85
登米	47	(10.2%)	166	(28.5%)	▲ 119
石巻	123	(10.0%)	258	(18.9%)	▲ 135
気仙沼	42	(8.5%)	35	(7.2%)	7
計	1,624	(9.2%)	1,624	(9.2%)	0

○変化量

	R5.3-H21.3			
	流入数【A】		流出数【B】	
南部	49	7.9%	202	16.9%
中部	375	3.1%	▲ 4	0.1%
大崎	▲ 94	▲1.8%	87	6.7%
栗原	▲ 59	▲6.0%	11	8.7%
登米	▲ 15	▲0.1%	▲ 15	3.5%
石巻	56	6.3%	37	7.5%
気仙沼	2	4.1%	▲ 4	2.9%
計	314	2.6%	314	2.6%

○　出願・学力の状況

・全県一学区化後の出願倍率について、主な進学校（仙台市内）※１、地域進学重点校※２のいずれも大きな増減は見受けられないが、地域進学重点校の出願倍率は１倍を下回る状況が続いている。

・全県一学区化後の学力状況調査における平均正答率について、年度毎の増減はあるものの、全県一学区化後の変化量は、主な進学校（仙台市内）　が＋14ポイント、地域進学重点校が＋10.6ポイントとなっており、若干の向上がみられる。

<学校タイプ別の出願状況の推移>

	後期選抜（一般入試）出願倍率											第１次募集出願倍率				
	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5	R6
主な進学校（仙台市内）	1.38	1.47	1.46	1.52	1.42	1.49	1.35	1.51	1.48	1.43	1.49	1.34	1.28	1.40	1.40	1.33
地域進学重点校	1.04	1.04	1.04	0.96	0.98	1.01	0.99	1.05	0.95	1.00	0.92	0.95	0.91	0.91	0.95	0.90

<学校タイプ別のみやぎ学力状況調査における平均正答率の推移>

	みやぎ学力状況調査（国数英）平均正答率　前年差											一学区化後 変化量 （前年差の累計値）
	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R3	R4	R5	
主な進学校（仙台市内）	7.6	▲ 11.4	11.2	▲ 3.3	6.5	▲ 4.0	2.4	0.9	▲ 2.9	5.5	1.4	14.0
地域進学重点校	7.2	▲ 10.0	11.0	▲ 6.2	8.3	▲ 4.4	1.0	1.5	▲ 2.8	6.0	▲ 1.0	10.6

※１　主な進学校（仙台市内）：仙台第一高校、仙台二華高校、仙台向山高校、仙台南高校、仙台第二高校、仙台第三高校、宮城第一高校、泉高校、泉館山高校、宮城野高校

※２　地域進学重点校：白石高校、角田高校、古川高校、古川黎明高校、佐沼高校、築館高校、岩ヶ崎高校、石巻高校、石巻好文館高校、気仙沼高校

○　進路状況

・主な進学校（仙台市内）のR5.3卒業生の進路状況は、①４年制国公立大学への進学割合（44.6%）が最も高く、次いで②４年制私立大学（34.3%）、④専修学校・各種学校（16.0%）の割合が高くなっている。全県一学区化前との比較では、４年制大学への進学割合が＋13.31ポイントとなっており、特に４年制国公立大学の進学率が＋11.76ポイントと高くなっている。

・地域進学重点校のR5.3卒業生の進路状況は、②４年制私立大学への進学割合（46.1%）が最も高く、次いで①４年制国公立大学（21.8%）、④専修学校・各種学校（18.6%）の割合が高くなっている。全県一学区化前との比較では、４年制大学への進学率が＋5.50ポイントとなっており、４年制国公立大学の進学率が＋4.14ポイントと高くなっている。

主な進学校（仙台市内）の進路状況

進路先	H21.3卒	H26.3卒	H31.3卒	R5.3卒	増減（R5.3卒-H21.3卒）
①４年制国公立大学	32.9%	36.0%	38.7%	44.6%	11.76%
②４年制私立大学	32.7%	35.3%	34.1%	34.3%	1.55%
③短期大学	0.6%	1.0%	0.6%	0.5%	▲0.03%
④専修学校・各種学校	32.7%	23.0%	21.8%	16.0%	▲16.72%
⑤就職	0.4%	0.5%	0.6%	0.5%	0.10%
⑥その他（受験準備含む）	0.7%	4.1%	4.3%	4.1%	3.34%
計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	－
高等教育機関等（①～④）	98.8%	95.3%	95.1%	95.4%	▲3.44%
４年制大学（①～②）	65.6%	71.3%	72.7%	78.9%	13.31%

地域進学重点校の進路状況

進路先	H21.3卒	H26.3卒	H31.3卒	R5.3卒	増減（R5.3卒-H21.3卒）
①４年制国公立大学	17.7%	17.2%	16.9%	21.8%	4.14%
②４年制私立大学	44.8%	49.6%	44.8%	46.1%	1.36%
③短期大学	4.7%	3.3%	5.8%	4.7%	0.00%
④専修学校・各種学校	23.5%	23.1%	22.4%	18.6%	▲4.93%
⑤就職	7.4%	5.8%	7.2%	6.2%	▲1.20%
⑥その他（受験準備含む）	1.9%	1.1%	2.9%	2.5%	0.64%
計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	－
高等教育機関等（①～④）	90.7%	93.1%	89.9%	91.3%	0.57%
４年制大学（①～②）	62.5%	66.7%	61.7%	68.0%	5.50%

※１　主な進学校（仙台市内）：仙台第一高校、仙台二華高校、仙台向山高校、仙台南高校、仙台第二高校、仙台第三高校、宮城第一高校、泉高校、泉館山高校、宮城野高校

※２　地域進学重点校：白石高校、角田高校、古川高校、古川黎明高校、佐沼高校、築館高校、岩ヶ崎高校、石巻高校、石巻好文館高校、気仙沼高校

（4）成果と課題

＜地区間流出入の状況＞

・全県一学区化前と比較して、地区間の流動化が進んでおり、生徒の学校選択における自由度は拡大していると考えられる。

・全日制公立高校への進学者について、平成31年度までは特定の地区への志願者の集中や生徒の流出等は見られなかったが、近年、中部地区から他地区への流出が減少に転じている。また、中部地区を中心に全日制私立高校への進学者が増加している。

・地区間の出入りが多い地区については、生徒の通学実態を踏まえた学校配置の在り方について検討が必要である。

＜出願・学力等の状況＞

・全県一学区化前と比較して、出願倍率に大きな変化は見られないが、地域進学重点校では出願倍率が１倍を下回っている状況が続いている。

・学力状況調査の結果からは、年度毎に増減はあるものの、主な進学校（仙台市内）、地域進学重点校ともに生徒の学習に対する理解度が若干向上していると考えられる。

・進路状況では、主な進学校（仙台市内）、地域進学重点校ともに４年制大学への進学率が高まっている。